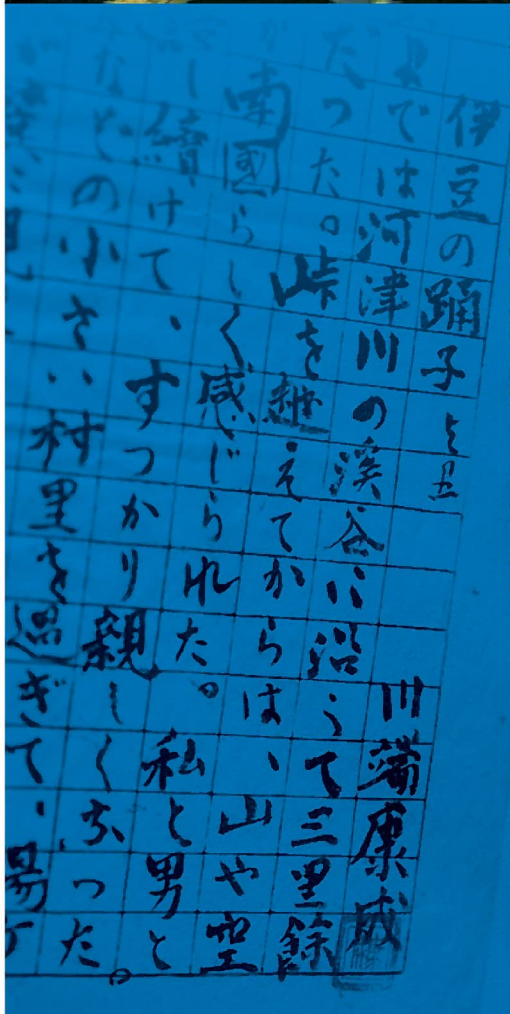
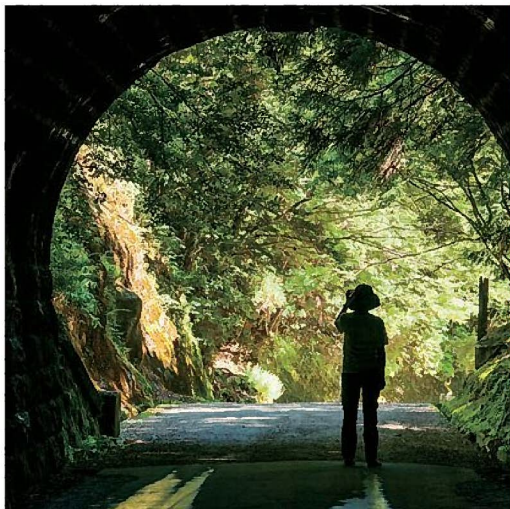


シリーズ・文学の舞台を旅する①

川端康成

『伊豆の踊子』を訪ねて



『伊豆の踊子』の舞台を歩く「踊子歩道」。全長約20kmの遊歩道は、大人の足で約6時間。道中、小説の冒頭で登場する天城峠や旧天城トンネル、踊り子と主人公の像にも出会える初景滝など天城の豊かな自然を存分に楽しめる。主人公の「私」になった気分で歩いてみるのもいい。

文学の
舞台を
旅する ①

『伊豆の踊子』を訪ねて

舞台となった宿が判明したのは、 小説発表の30年後

今年7月、日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した作家、川端康成の未投函の恋文が93年ぶりに発見され、話題となりました。川端は当時22歳。思い人であった初代は15歳。川端が27歳のときに発表した『伊豆の踊子』の原点となった女性ではないかと言われています。

『伊豆の踊子』は、大正7年の秋、川端が19歳で伊豆を旅したときに旅芸人と道連れになった体験をもとに書かれました。20歳の学生である「私」は、初めての伊豆への一人旅で、湯ヶ島で出会った旅芸人の若い踊り子に心惹かれます。天城峠の茶屋で再会してから下田まで、道中の踊り子に対する恋心を旅情とともに綴った美しい短編です。

修善寺方面から下田街道を進み、天城峠のトンネルを抜けて、河津川の溪谷に沿ってしばらく行った湯ヶ野にある「福田家」が、物語の中で主人公が宿泊した宿です。ところが、小説には「福田家」という名称はまったく出てきません。「実は、小説が発表された当初は、誰もこの宿が舞台にされているとは知らなかったんですよ」と話すのは、現在の福田家のご主人。小説が発表されたのは昭和元年。それからかなり時を経た昭和30年代に、川端の主治医であり、宿の常連だった女医さんから話を聞き、引き合わせてもらったのが縁で、川端との交流が始まったと言います。宿の一角にはその後に書いてもらったという直筆の原稿や色紙、映画化された際の撮影風景の写真を展示した「伊豆の踊子資料館」が設けられています。



伊豆の踊子の宿「福田屋」



川端康成が宿泊した部屋



創業時そのままの風情ある檜のマス風呂

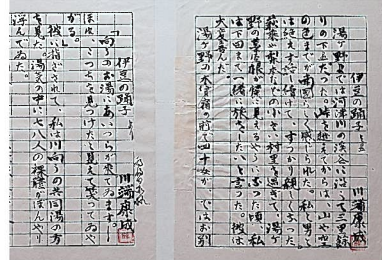
湯ヶ野温泉マップ



「福田屋」にある伊豆の踊子文学碑
伊豆の踊子資料館



東海交通の
ボンネットバス
「伊豆の踊子号」
写真提供：静岡観光協会



川端康成直筆の原稿



河津七滝のひとつ初滝。踊り子と「私」の像が滝を訪れた人々を出迎える

「踊子は太鼓を提げていた。私は振り返り振り返り眺めて、
旅情が自分の身についたと思った」
——川端康成著『伊豆の踊子』より

森林浴をしながら物語をたどれる ハイキングコース「踊子歩道」

「福田家」は河津川を渡った橋の先にある、約140年の歴史を持つ趣のある温泉宿です。学生だった川端は、この宿に三泊していました。宿泊したのは橋と庭に面した2階の部屋で、「私」が旅芸人に金包みを投げた中庭に面した窓もそのまま、踊り子への思いを抱えて何度も浸かった地下にある榎風呂も当時のままの風情を保っています。この榎風呂の窓から踊り子たちが浸かっていた共同浴場が見え、無邪気な踊り子が裸のまま湯槽に飛び込むほほえましい情景が描かれています。

宿の名物は、猪の肉をつかったぼたん鍋。「川端先生もとてもお好きで、よく鎌倉のお宅にもお土産に持っていきました。伊豆の猪は新鮮なので、ちっとも臭みがないんですよ」とご主人。川端はこ

の宿で執筆することはなく、いつも寛いでいたため、一般に言われるような気むずかしさは感じず、とても気さくな人柄だったそうです。

この宿近辺から浄蓮の滝まで、全長約20kmの「踊子歩道」があり、道沿いには七滝めぐりや、小説にも登場する旧天城トンネルなど見どころがたくさんあります。早春に咲く河津桜を皮切りに、春から夏にかけての緑や、秋の紅葉、冬の温泉も楽しめる場所。森林浴をしながらハイキングコースを楽しみ、宿の温泉に浸かった後に、もう一度『伊豆の踊子』を読み直せば、登場人物の息づかい、揺れる思い、濃厚な自然が、思わぬ近さで迫ってくることに、改めて驚かされます。

河津 湯ヶ野温泉／伊豆の踊子の宿 福田家
住所 ●〒413-0507

静岡県賀茂郡河津町湯ヶ野236

電話 ●0558-35-7201

宿泊料金 ●15,000円～

(1泊2食付1名の料金、税・サ別)

